

# ただ今、 道産子修行中!

まさごのりこ北海道魅力発見録

～その4～

## ～知床ふたたび～

真砂 徳子

フリーアナウンサー

「クマだぞー!」の叫び声に振り返る。その距離、数十メートル。地上であれば気絶必至の状況だ!しかし幸いなことに、私は海の上。波に揺られるカヤックから、海岸でエサを探すヒグマの愛らしさに魅入られ、歓喜の声をあげていた。今年夏、知床半島を周回するカヤックツアーに参加した時のことである。

マイクよりも重いものを持ったことがなく(?)、入浴と美食が趣味の私とカヤック。何ともミスマッチな取り合わせだが、意外にも私、カヤックの経験は豊富なのだ。実は4年前、道内各地でカヤックをしながら日本の将来を語るという、これまた私にはミスマッチな内容の番組に出演した。主演は東京大学名誉教授月尾嘉男先生。肩書きからは想像もできない体育会系教授に、積丹半島、三陸海岸、釧路川、天塩川、古座川など全国各地の名勝で、カヤックを体験させていただいて

いた。

そしてなんと、知床半島の周回は今年で2度目。知床と言えば、全国のシーカヤッカーあこがれの秘境だが、昨年に続き、月尾先生はじめ、知床を知り尽くしたベテランカヤッカーのお誘いで、夢のような機会が再び舞い込んだのだ。とはいえ、羅臼から斜里まで距離にして70キロ、順調にいつて二泊三日の本格ツアーである。紺ペきの海。いくつもの滝が流れる断崖絶壁。名画と名曲の舞台・知床岬。昨年の初体験では、目にする知床の全てに心を奪われた。それはこぐ手を止めるほどの感動であった。しかしなぜか艇はスイスイ進む…?何しろ私は二人乗りカヤックの前座。後でこぐ月尾先生の姿なんて目に入らないのだから!上陸しても事態は同じ。テントを張る、流木を拾い集める、食事の支度をする…そんな作業はそっこのけで、生理現象に追われモタモタと動き回るばかり。つまり昨年の私は、海上でも地上でも全くの役立たずであった。

そこで、今年こそはと一念発起。こんな私を誘ってくださったメンバーのご厚意に応えようと、勇んで知床に向かった。しかしそれがとんだ勇み足。出発前日は、気合いが入り過ぎなかなか眠れず、寝返りを何度も繰り返しているうちに、とうとう朝を迎えてしまった。

昨年同様、二人乗りカヤックの前座に座り出発。天気は良かったものの、思いのほか風が強く、カヤックは上へ下へと大きく揺れた。「うっ、気持ち悪い!」船酔いは減多にしない私だが、昨夜の寝不足がたたったようだ。後座の月尾先生に恐縮しながら、こぐ手を休める。一向に止む気配のない風。波にほんろうされるカヤックは、まるでゆ



撮影 村上智子

りかごのようだった。時間が経つにつれ気温も上昇。私の体も適度に温まり、気づけば、今度はあまりの気持ちよさに眠ってしまっていた！そしてその後、上陸するまで、私のパドルが海水をかくことはなかった。

決意もむなしく、今年も立派な「役立たず」となってしまった私。知床の大自然<sup>たいじ</sup>に対峙するには、体力面でも精神面でも、まだまだ修行が足りないようだ。

ところで、知床の自然の素晴らしさは、私の悪戦苦闘に関係なく、今年も美しい姿を見せてくれた。居眠りを誘った風と晴天。雲一つない夕焼け空。真っ赤に燃える太陽が、ゆっくりと水平線に近づくと、蒼い海面が茜色に輝いた。テントを張った岸边から急いでカヤックを海に出し、海上で、落日の瞬間を見守る。その神々しさに思わず息を飲み、メンバーの誰からともなく拍手が沸いた。夜は、星空の洗礼を受ける。空一面に輝く星を仰ぎ、眠くなるまで、不思議な浮遊感を楽しんだ。

昨年、世界自然遺産に登録され、この手つかずの自然は北海道や日本だけではなく、世界の宝物となった。アイヌ語で「地の果て」の意「シリエトク」を語源とする知床だが、そんな立地にもかかわらず、現代では、様々な情報伝達手段で全世界の人がその様子を容易に目にできる。しかし、現実の知床の迫力は、映像や写真とは比べものにならないことは言うまでもない。

その土地でしか出会えない自然景観（旅情）、その土地ならではの歴史伝統（事情）、そして、その土地に住む人たちとの触れ合い（人情）。これらは地域の魅力の源泉ともいうべき三つの「情」といわれている。いずれも、決してインターネットでは伝えきれない、人の感動やぬくもりを通して伝わるものである。自称・道産子アナウンサー。地元の魅力の「伝え手」として、今後も精進を重ね、今年も私を優しく迎えてくれた知床の大自然と知床の人たちに感謝の意を込め、文字どおりの「知床旅情」を、自らの声で伝え続けて行きたいと思っている。

さて、今回のカヤックツアー。ここで話は終わらない。旅の終わりに、とんでもないサプライズ（驚かせること）が待ち受けていた。

「クマだ！」今度は、歓喜の声ではない。正真正銘の叫び声である。それは、ゴール地点のウト

口に近い海岸で迎えた最終日午前4時。眠っていた私は、その声に飛び起きた！テントの入り口を開け、同じく隣で飛び起きた女性メンバーと二人、辺りを見回した。叫び声の主は早起きした男性メンバーのようである。眠気まなこをこすりながら、海岸を見ると…そこには、1頭のヒグマがこちらを向いて、さらに近づいてくる気配。凍りつきそうになったとき、熊スプレーを備えたメンバーが数歩近づき威嚇すると、熊は一瞬ビクッとしてから、小走りに逃げ去っていった。ほっと胸をなで下ろした瞬間、思わず同じテントの女性メンバーと顔を見合わせた。あれは、もしかして…？

実は、叫び声より十数分前、私たちのテントに、得も知れぬ重いモノがのしかかってきていた。風の強い海岸である。私たちは、頭上に感じる知床の風圧を両手で何度も押しのけていたつもりだった。「知らぬが仏」とは、まさにこのこと。どうやら、あれはヒグマだったかもしれぬ！？

原生の自然は知床の価値。ヒグマとの遭遇に、今更ながら、私たち人間が自然への侵入者であることを思い知らされた。本当に伝えなくてはいけないことも実感した、知床の夏。さて来年は、いったいどこでヒグマとの再会を果たすのだろうか。



#### profile

**真砂 徳子** まさこのりこ

フリーアナウンサー。

埼玉県出身。明治大学文学部卒。新潟テレビ21アナウンサーを経て、北海道に移住。ニュース、バラエティ、情報・教養番組などテレビを中心に幅広く活躍。2005年独立し、真砂事務所を開設した。<http://www.masagonoriko.com/>